

## 新発見！ 平安時代の宅地



調査区全景（東から）（写真奥が山代温泉）



掘立柱建物と井戸（上から）



掘立柱建物と井戸（南から）

山代イチマイヨリ遺跡は、加賀市山代温泉の東方を流れる尾俣川の左岸に立地する新発見の遺跡です。今回、都市計画道路山代粟津線街路整備工事に先立ち、発掘調査を実施しました。

調査の結果、川際の段丘上で平安時代末頃とみられる掘立柱建物1棟と井戸1基などを確認しました。この掘立柱建物は南北方向を主軸とする4間×4間以上の総柱建物で、柱穴から11世紀末～12世紀代の土師器の皿が出土しました。柱の抜き取り後に埋めた可能性があります。また建物の西側には井戸があり、その西側は空閑地となることから、建物は尾俣川を背にした宅地に建てられ、南側や西側を宅地の入口とした状況が推測されます。

周辺では発掘調査がおこなわれた事例が少ないので、平安時代の集落が新たに確認されたことは、この地域の歴史解明につながるものとなりました。

R1 発掘調査

ゆみなみ いせき か が し  
弓波遺跡 [加賀市]

弓波遺跡は、加賀市北部を占める江沼低地の中央付近にあり、八日市川と尾俣川<sup>おまたがわ</sup>が合流する地点に広がる遺跡で、平成 28 年度に北陸新幹線建設にともない約 31,000 m<sup>2</sup>の調査を実施しています。この調査では、弥生時代後期～中世の集落跡のほか、弥生時代後期<sup>ほうけいしゅうこう</sup>の方形周溝墓、古墳時代前期の方形区画溝、中期や後期の古墳などがみつかっています。

今回の調査は、その北陸新幹線事業地に接した道路設置にともなうもので、細く折れ曲がる北側調査区は、平成 28 年の調査区に沿った形状となっています。

南北の両調査区とも、弥生時代後期～古墳時代の掘立柱建物<sup>ほったてばしらたてもの</sup>、土坑<sup>どこう</sup>、溝などが確認されました。北側調査区では、古墳時代終わりごろの掘立柱建物が重複しており、建て替えとみられる形で柱穴<sup>ちゅうけつ</sup>の複合が確認されます。

南側調査区では、南に向かうほど遺構密度が薄くなっており、集落の南端にあたるものと考えられます。

出土遺物は弥生土器や古墳時代の土師器<sup>はじき</sup>、須恵器<sup>すゑ</sup>のほか、平成 28 年度にもみられた碧玉片<sup>へきぎよく</sup>が多数出土したことから、玉作り工房が展開していた可能性が高いと考えられます。また、北側調査区の北端で確認した溝は、古墳時代でも時期幅のある土器が多く出土しました。



調査区の空中写真（南から）



北側調査区の空中写真（南から）



南側調査区 完掘状況（北から）



北側調査区 複合する柱穴（北から）

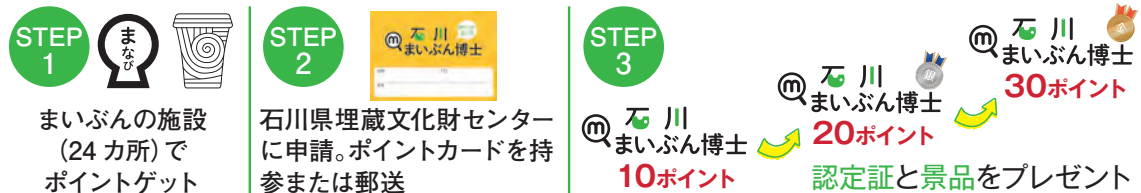


北側調査区 古墳時代の土器出土状況（南から）

## R1 古代体験

石川まいぶん<sup>はかせ</sup>博士チャレンジ講座

「石川まいぶん博士」は、埋蔵文化財に親しみ、より一層の理解を深めてもらうことを目的として、小学校3年生から中学校3年生を対象に、県埋蔵文化財センターをはじめとする県内の文化財に関する施設において、古代体験や展示の見学をおこなうことでポイントを付与し、その数によって「博士」に認定する事業です。



今回の講座は、この博士認定事業の一環として、令和元年9月23日(月・祝)に開催した特別講座で、10名の博士候補者が「縄文人のワザ」にチャレンジしました。

最初に県内から出土した縄文土器や磨製石斧など、縄文時代の実物を観察するガイダンスをおこない、大昔に暮らした人々の生活用具について予習しました。

次に「縄文人のワザ」にチャレンジしてもらうため、貫頭衣を着用しました。センター古代体験ひろばにある縄文時代の竪穴住居の内部に入り、中央にある石囲いの炉を囲んで、みんなで縄文の暮らしを体感しました。屋外の栗林では、住居の骨組みとなる木の伐採を石斧でおこない、中庭に置かれた動物の的を弓矢で射てから、黒曜石のナイフで鳥肉を切る体験をおこないました。最後は縄文土器の文様の写し取り(拓本)をおこない、クリアファイルに挟んで持ち帰りとなりました。

参加者には「まなび・体験」の各1ポイントが付与され、「博士の銀」にステップアップした児童がいました。また、「黒曜石の切れ味がすごい」や「縄文人は大変だ」などの感想が聞かれました。



土器と石器の観察



貫頭衣の着用



竪穴住居を体感



石斧による伐採体験



黒曜石ナイフの使用体験



土器の文様の写し取り

R1 古代体験

古代体験学習講座 『須恵器づくり』



令和元年10月20日(日)に「須恵器づくり」を開催し、20名の参加がありました。

最初に須恵器の歴史や特徴についてガイダンスをおこないました。須恵器とは、古墳時代中頃に朝鮮半島から伝わった古代を代表する焼物で、当センター近くの金沢市末町地内でも、奈良・平安時代の須恵器窯跡がみついています。講座では、県内で出土した須恵器の実物を参考に「杯」や「壺」を製作しました。一見、簡単そうに見える形でも、ロクロで薄くつくるのは難しく、参加者のみなさんは古代の技術の高さを体感できたようでした。

製作した作品は、しっかりと乾燥させたあと、センターの復元古窯に窯詰めしました。古代の文房具づくりで製作した硯を含め、窯詰めした作品は460点ほどになりました。薪を燃料に約70時間かけてじっくりと焼き上げ、最終的には1,200℃を越える高温で焼成し、最後に窯の焚口を閉じて空気を遮断し、還元状態にしました。窯が冷めるのを待ち、1週間ほどしてから窯出しをおこないました。焼き上がった須恵器は、固く焼きしまって灰色になり、自然釉のかかった作品も見られました。12月14日(土)から本館ホールで作品の展示・返却をおこないました。



製作の様子



焼成中の焚口



窯出し時の作品



展示の様子

## R1 古代体験

## 古代体験学習講座 『弥生の玉づくり』

令和元年12月22日(日)に「弥生の玉づくり」の学習講座を開催し、13名の参加がありました。最初に小松市八日市地方遺跡出土品の観察を交えながら、まが玉や管玉などの歴史や特徴についてガイダンスを行い、弥生時代中期の北陸独特のくびれをもつまが玉をモデルに、石に溝を作って割る「施溝分割技法」を用いながら、まが玉と管玉づくりを体験してもらいました。

まず、6cm四方の滑石に石鋸で溝をつけて、そこに木のクサビをあて、石で叩いて割る「施溝分割技法」により、まが玉2個、管玉3個程度程度の石核をとる作業をしました。

分割した石核を石で削って形を整え、鉄錐で穴をあけ、砥石などを用いながら磨いて完成しました。参加者は集中して作業され「昔の人の技術はすごい」や「夢中になった」などの声が聞かれました。



八日市地方遺跡出土品のガイダンス



施溝分割技法による石材のカット



石を削って形を整えます



穴あけ作業



砥石で磨いて仕上げます



完成です(参加者作品)

R1古代体験

古代体験ミニ講座『剣づくり』



令和2年1月26日（日）に午前・午後各1回の「剣づくり」ミニ講座を開催しました。

最初に金属の<sup>ちゆうぞう</sup>鑄造や特徴についての説明をおこないました。日本では弥生時代に、<sup>すす</sup>錫を含んだ銅の合金でつくった<sup>せいどうき</sup>青銅器やその製造技術が伝わり、<sup>どうけん</sup>銅剣、<sup>どうきやう</sup>銅鏡、<sup>どうたく</sup>銅鐸などの生産が始まります。次に、職員が剣の鑄造を実演しました。青銅を<sup>と</sup>溶かすには1,200℃以上の高温が必要で危険なため、錫を主体とする<sup>ていゆうてんごうきん</sup>低融点合金を溶かして<sup>いがた</sup>鑄型に注ぎました。鑄型のモデルは長さ16cmの中細形銅剣です。そしていよいよ参加者の体験作業が始まります。事前製作済の剣の湯口を<sup>ゆぐち</sup>金鋸で<sup>かなのこ</sup>切断し、<sup>と</sup>荒い<sup>とし</sup>砥石で余分なバリを削ります。次の<sup>けんま</sup>研磨作業では、砥石と研磨剤で根気よく磨き上げます。参加者のみなさんは、だんだんピカピカになる剣の様子にわくわくしながら時間を過ごしました。



鑄造の解説



体験の様子



完成した剣

R1古代体験

古代体験ミニ講座『ガラス玉づくり』



令和2年2月2日（日）の「ガラス玉づくり」では、2回のミニ講座で43人の参加者がありました。

日本では、弥生時代にガラス玉の製造技術が伝わり、<sup>くだたま</sup>まが玉、管玉、丸玉などの種類が生産されるようになります。製作方法ですが、まずは、ガラス玉専用のバーナーに火をつけ、<sup>りけいざい</sup>離型剤をつけた鉄芯棒とガラス棒をじっくりあぶります。鉄芯棒の離型剤が赤くなり、ガラス棒の先端が溶けてきたら、鉄芯棒を回しながら<sup>と</sup>溶けたガラスの先端を巻きつけ、回転させて丸い形に仕上げます。その後、ガラス玉を徐冷剤の中で冷やし、水の中で砥石を使ってバリをとり、<sup>あな</sup>孔に残った離型剤をブラシで洗い流せばガラスの丸玉の完成です。参加者のみなさんは、最初は溶けたガラスの巻きつけに苦勞していましたが、2個目、3個目になると慣れてきて、大きめのガラス玉製作に挑戦する方もみられました。



ガラス玉の歴史解説



製作の様子



完成したガラス玉

## 令和元年度講座 考古学最前線 『水害とともに生きる - 弥生時代の村々 - 』

令和元年11月30日(土)、石川県地場産業振興センター・本館第1研修室で開催しました。講演テーマが水害であり、近年自然災害が多い中で、参加者の皆さんからは水害などに対し、古代の人々がどう対応していたのか、過去の災害を知ることで防災に役立てられないか、といった参加動機が聞かれました。

始めに「県内遺跡にみる災害痕跡」と題し、当センター調査部の浜崎悟司から、断層が発見された金沢市梅田B遺跡や手取川扇状地上の遺跡にみられる洪水痕跡、地震による噴砂痕などの紹介がありました。その後、土器と集落から弥生～古墳時代の人々の生きづらさを研究されている若林邦彦さん(同志社大学歴史資料館 教授)を講師に迎え、大阪平野北中部の遺跡を例に、弥生時代から古墳時代にかけての集落のあり方と水害など環境変動との関連などについてお話ししていただきました。樹木の年輪に含まれるセルロースの酸素同位体分析からわかる降水量の変化が、集落の移動や集落数、その規模、水田経営や古墳の築造などの社会変化とどうかかわるのか、ダイナミックで興味深い展開の講演に、「これまでと違った視点で弥生、古墳時代をみる事ができた」「当時の人々の姿が見えるようで、これまで知っていた弥生時代の概念が壊されよい学習となった」などの感想が寄せられました。



講師の若林邦彦さん

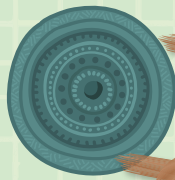


講演会場の様子



質問を受ける若林さんと浜崎さん





# まいぶん日誌

令和元年  
(2019)

令和2年  
(2020)

11月 ~ 2月



11月

古代の文房具づくりです



須恵器の窯焚きです



木簡年賀状づくりです

12月



令和最初!よく焼けますように!

一年お世話になりました。



感謝を込めて製作!

間違えたところは削って修正!



門松を飾り  
新年を迎えました

1月



令和2年もよろしくお願いします。

移築古墳の越冬準備です



暖冬とはいえ  
ついに積雪しました



春はまだ遠し!

古代の独楽づくりに挑戦



第2回ホール展です  
県内の4遺跡を紹介

その中の一つ  
羽咋市大町ゴンジョガリ遺跡です

県の広報番組の取材です

2月



この機会をお見逃しなく!



古墳時代の土器などを  
展示しています



みなさん  
センターに来てくださーいね!